

## 書評『世界で生きるチカラ

## 国際バカロレアが子どもたちを強くする』

坪谷ニューエル郁子 (著), ダイヤモンド社, 東京, 2014

現代生活学部 食物栄養学科 柳 元和

はじめに。国際バカロレア (International Baccalaureate, IB) とは、1968 年にスイスのジュネーブで設立された非営利団体の名称で、同団体による大学入学資格試験・教育プログラムも指す。もともと IB は、国際的な機関や外交官の子どもが様々な国の大学入試制度に対応するため、世界共通の大学入学資格と成績証明書を与えることを目的として出発した。

今、大学入試センター試験が揺れている。従来からあるマークシート方式の試験を継続すると、グローバル人材の育成は<sup>おぼつか</sup>覚束ないことを、文部科学省が深く認識していることの現れである。マークシートでは人が育たない。それでは、いかなる教育が問われている (あるいは問われていた) のか? 残念なことに、その答えは酷評されている「ゆとり教育」の中にあっただと言わざるを得ない。つまり「ゆとり教育」の理念が誤っていたわけではなく、その実行過程に重大な誤りがあったと考えられるのである。本書はその問題解明の糸口を示してくれている。

まず著者は現代の若者が「デジタルネイティブ」であると規定する。総務省によれば平成 26 年末の情報通信機器の普及状況をみると、携帯電話・PHS 及びパソコンの世帯普及率が、それぞれ 94.6%、78.0% であり、携帯電話・PHS の内数であるスマートフォンは、64.2% (前年比 1.6 ポイント増) と急速に普及が進んでいる。スマートフォン一人一台時代の到来である。グーグルで検索すれば欲しい情報はいつでも手に入る。「フェイスブックでチャットしながら友人たちと一緒に宿題を進めたりする」時代なのである。したがって講義一辺倒の「知識詰め込み型の教育」は「新しい時代に対応できる人材を作れなかった」し、「制度疲労」を起こしていると著者は述べている。これが「日本の低成長」の「一つの要因である」と断定さえしている。

そもそもセンター試験には「一発勝負」的要素がある。多くの大学は「一定の学力をきちんと担保したうえで、自分の学校にふさわしい人物かどうかを見る」という作業を怠ってきた。そのためペーパー試験の点数以外は「合否基準を主観的なものに頼っており、本来あるべき客観的な基準がなかった」のである。そして大学全入時代の到来とともに「学力低下に拍車」がかかってしまったと著者は分析している。この状態にしびれを切らしたのが文部科学省である。そしてセンター試験改革を通じてこの問題の解決に取り組もうとしているように思われる。

しかしながら問題は教育システムの中だけに留まらないというのが著者の主張である。「変わらなければならないのは大学だけではなくありません。その先にある企業も、それを含む社会全体も、同様に国際化を進めていかなければならないのです。」つまりグローバル化とは何なのかを社会全体が真摯に受け止め、それに立ち向かう人材を

どのように育成していくかに問題の本質があるということである。したがって「日本の若者たちにとって魅力ある国となるために、社会や教育がどのように変わっていけばいいのかを考え」なければならない、「私たち日本人がいま足りないもの、そして絶対に失ってはいけないもの」を再発見しなければならない。そうしなければ「意欲や志の高い若者が日本を飛び出してしまう」のではないかと著者は懸念を表明している。

ではグローバル人材とは何なのか？2012年6月に発表された「グローバル人材育成推進会議」（内閣府、外務省、経済産業省、厚生労働省、文部科学省）によると、

要素 I：語学力・コミュニケーション能力

要素 II：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素 III：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

となっている。ところが日本の教育カリキュラムは、これらの理念を実現するには程遠い内容であると著者は指摘する。その端的な例が語学授業である。中学生に”This is a pen.” から始めるとは何事か、「子どもたちの発達段階に合わせ、脳に刺激を与えるような授業」になっていないと批判している。そして「文法・読解・和訳といった教科書中心の授業が、語学への興味を失わせ、私たち日本人に英語への苦手意識を植え付けてきてしまった」とまで語っている。そもそも特定の語学の習得には最低でも2000から2500時間が必要であるとされている。これだけの時間を学習に費やすことができる秘訣は「知的刺激」以外に無いのだと著者は断言している。言い換えると、英語を教えるのではなく、「英語をツールとして、人間教育をしたいのだ」

(Learning Through English、LTE) と結論している。

そのような観点からすると、もともと日本の教育には多様性（ダイバーシティ）を認めるという文化があったのに残念であると著者は述べる。またこの点がアメリカ社会とは大きく異なるとも述べている。自由の国アメリカという標榜とは違って、アメリカ社会の多様性は日本より小さいと言うのである。半面、「アメリカの社会は、マニュアルに従って行動すれば、素人でも効率的に同じ品質の商品を提供できる、いわばマクドナルド的な文化が主流」であり、職人技を尊重する日本やマイスター制度を維持するドイツとは違うのだと語っている。職人は誰に強制されるでもなく自ら研鑽に励む。それが学びである。マニュアルを覚えるのではない。「自ら考え、判断する力」が欠かせない。それが21世紀の世界標準スキルであると著者は強調している。

「自ら考え、判断する力」は、どこからやって来るのだろうか？それは自分で「自分の未来を選択する」ことからやって来るのだとしている。つまり「進路選択」とは、それほど根本的な作業であって、「自分の中にある本当の夢に真摯に向き合うこと」なしには生まれないのではないか、その意味で多くの日本人は夢を疎かにしすぎたのではないかと著者は警告している。その点、IBは成長段階に合わせて子どもたちをサポートしており、その理念として

「多文化に対する理解と尊敬を通じて、平和でより良い世界の実現のために貢献する、探究心、知識、そして思いやりのある若者の育成を目的とする。

学校や政府、国際機関と協力しながら高度なプログラムを開発することで、世界中の子どもたちが、一人ひとりの違いを知るだけでなく、それぞれに理があることを理解し、行動的で共感する心を持ちながら、生涯学び続けることができる学習者になるよう働きかける。」

という真摯な夢を掲げている。特に重視しているのは「振り返りができる人」（内省力）であるという。子どもたちがこれらの能力を育むために、学びを支える教師たちは「生徒以上に学び続ける」。定期的な研修があり、授業プランの共有とディスカッションを行う。探究と内省を繰り返しているとのことである。

IBが提供しているプログラムは大別してPYP（幼稚園・小学校レベル）、MYP（中学校レベル）、DP（高校レベル）になるが、その詳細については原著をお読みいただきたい。日本での実践例や、そこで学ぶ生徒たちへのインタビューも大いに刺激的である。それらを行っている姿勢は、「自分を取り巻く世界に主体的にコミットする」ためのサポートであり、「今は存在していない職業」への準備であり、「一生学び続けられる人材」の育成である。

最後にDP（高校レベル。対象：16-19歳。プログラムは2年間）について筆者が印象的だった点を述べておきたい。教科グループは6つ（言語と文学、言語習得、個人と社会、実験科学、数学とコンピューター科学、芸術または選択科目）あり、教科以外の必須カリキュラムとして、課題論文、知の理論、課外活動の3つがある。驚くのはその徹底した評価システムである。外部評価は「世界統一試験」で北半球、南半球ごとに年一回、それぞれ3週間通しで一斉に行われる。それとは別に内部評価がある。その割合は教科によって異なる。6教科全体の最高得点は42点で、それに課題論文等3点が加わって45点。DPの修了資格を取得するには最低24点が必要である。この採点方法は世界の一流大学（オックスフォードやケンブリッジ、ハーバードなど）から高く評価されている。その理由は、1) 年度ごと、国ごとにおける平均点にブレがないこと、2) 入学後のパフォーマンスが高く、大学院への進学率も高いこと、に要約される。また生徒自身にも自分で進路を選択できる力が身につけているので、大学との相性が良くなるのである。何より衝撃的なのはDPには理系と文系の区別がないことで、分野を横断する学際的な学びを行う。

「国際バカロレアというと、リベラルアーツといった教養中心の教育であり、文系の学部に進む学生が多いかのように思っている人が多いかもしれませんが、それは大きな誤解です。」

「真の探究心を養った生徒たちは、文系・理系の別なく、本当に学びたい分野を自ら選択し、専門性を高めていくのです。」

これこそが「ゆとり教育」で我々の目指したものであったのではなからうか？